

〈書評〉

ポール・B・トンプソン 著／太田 和彦 訳  
『食農倫理学の長い旅—  
〈食べる〉のどこに倫理はあるのか』

藤 木 篤\*  
Atsushi FUJIKI

本書は、2015年の北米社会哲学協会の「ブック・オブ・ザ・イヤー」に選出された、Paul B. Thompson. (2015). *From Field to Fork: Food Ethics for Everyone*, Oxford Univ. Pr. の全訳である。原著は、食農倫理学の分野において従来議論されてきた（あるいは十分には議論されてこなかった）種々の問題を、包括的に取り扱った「入門書」（p.265）である。著者によれば、本書は「農家や研究者、その他のフードシステムの専門家と一緒に働いてきた三〇年の間に学んだ多くのことを、より広く、一般の人々に届けるために執筆」（p.ix）されたものである。

本書は全九章から構成される。序章にあたる「はじめに一倫理学についての概略を添えて」、「1 あなたはあなたの食べる物では決まらない」、「2 食農倫理学と社会的不正」、「3 食生活の倫理と肥満」、「4 食農倫理学の根本問題」、「5 家畜福祉と食肉生産の倫理」、「6 フードシステムと環境への影響—地場産の魅惑」、「7 緑の革命型の食品技術とその満たされなさ」、「8 再考、今度は想いを添えて—倫理、リスク、そして食の未来」の九つである。これらのタイトルからも窺える通り、社会的不正や肥満、飢餓と貧困、食肉生産と動物福祉（ア

---

\* 神戸市看護大学 Kobe City College of Nursing

ニマルウェルフェア)、ベジタリアニズム、農業の持続可能性、そして農業バイオテクノロジーとその倫理的課題などのテーマが、本書における、また米国のフードエシックスにおける主要な問題関心となる。ただ、もちろん本書は食農倫理学における全ての問題を網羅しているわけではない。著者が認める通り「扱いきれなかった話題は、まだまだたくさんある」(p.8) ため、本書が取り扱う話題は広範にわたるものの、ざりとて通読すれば食農倫理学の全てがわかるというものではない。なお本書には訳者による優れた解説が付されているため、全体の解題についてはそちらに譲りたい。

また食農倫理学は、時に食選択の問題として単純化して捉えられる場合があるが、著者が明言する通り、本書には「何を食べたら良いかを提示する意図はない」(p.7) ことは最初に理解した上で、読み進めた方が良好だろう。本書が意図するのは、問題の単純化や特定の方向への教導ではない。むしろ複雑な問題を複雑なまま捉えること、そのために倫理分析をさらに複雑にすることを目指している。こうした態度は、「それぞれの事例の中で、私は、政策への提起や個人的選択への助言よりも、むしろ現代のフードシステムについて行われている倫理分析を、もっと複雑にすることにこそ力を注ぐ」という著者の言葉にも表されている。したがって本書は、あくまで入門的解説書として一般向けに執筆されたものではあるが、一方でそうした書籍に対して一般的に期待されるような、わかりやすさや単純さ、特定の見解に対する擁護(アドボカシー)、そして事典のような網羅性を有しているわけではなく、またそうした方向性を目指しているわけでもない。もちろんこれらは本書の特徴ではあっても、欠点や課題ではない。

一方で、そうした特徴を差し引いて考えたとしても、本書を読み進める上で難関となる箇所が少なからず見受けられる。紙幅の都合上、ここでは二点を指摘するに留めたい。一つ目は、トンプソンがかねてより複数の著作において主張している、「〈農〉の哲学」(アグラリアン・フィロソフィ Agrarian Philosophy) に関するものである。本書では、産業哲学(インダストリアル・フィロソフィ Industrial Philosophy) の対概念として登場し、様々な事例を検証する中で、し

ばしば対比される。訳者の言葉を借りれば、産業哲学は「農業をはじめとする食に関わる多種多様な活動を、あくまでも産業の一分野と見なす観点」であり、〈農〉の哲学は「食と農に関わる活動を、日常生活の習慣や文化的な慣行を形成し、それを生態系と結び合わせる営みと見なす観点」(p.333)を指す。第7章と第8章で、遺伝子組み換え技術を事例として分析し、最終的に産業哲学と「農者(アグリアン)的で統合的な食の哲学」の対話の必要性を説いている。このことから明らかであるが、「アグリアン」は本書の主張の根幹に関わる概念である。しかし、この「アグリアン」の概念については、多くの日本の読者にとって、馴染み深いものであるとは言いがたい。

トンプソンはかつて、アグリアン哲学について詳細に論じた『アグリアンの洞察』(The Agrarian Vision: Sustainability and Environmental Ethics. (2010). 未邦訳)を出版しているが、同書の内容に基づいた、アグリアン哲学そのものに関する詳細な説明はなされていない。確かにトンプソンは本書において、フードシステムと環境の関係を描いた第6章で、一節を割いて「アグリアン哲学とは何か」をヘーゲルの歴史哲学の観点を中心に据えて論じている。しかしながら、肝心の「アグリアン哲学とは何か」に関する説明はほとんどなされないままである。したがって、訳者による優れた解説と充実したブックガイドの助力を得たとしてもなお、本書のみを頼りに、初学者がアグリアン哲学の内容を理解することは、難しいように感じられる。

読者が食農倫理の専門家のみであれば、まだこうした難関は大きな問題とはならないかもしれないが、冒頭で確認した通り、本書はあくまで「一般の人々」を対象として書かれたものである。例えば竹中は、トンプソンの農業哲学を基盤に、日本においてアグリアン型農業を実現する可能性について論ずる論考を発表しているが、こうした文章が読者の助けになるように思われる(竹中真也.(2019). 日本におけるアグリアン型農業の可能性:P・B・トンプソンの農業哲学を手掛かりにして. 環境倫理, (3), 64-80.)。また竹之内による「産業的農業哲学」と「アグリアンの農業哲学」に関する論説も、その一助になるはずである(竹之内裕文.(2018). 第10章 農と食を結びなおす一産業社会に

における農と食の倫理, 秋津元輝・佐藤洋一郎・竹之内裕文(編著) 農と食の新しい倫理, 251-283.)。

二つ目の難関は, 食農倫理学が, 他の応用倫理学分野とどのような関係にあるのかが, 必ずしも明示されていない点である。本書において, 食農倫理学は環境倫理学と強く結びついたかたちで論じられている。トンプソンはかつて, 環境プラグマティズムに関する世界で最初の学術誌 *Environmental Pragmatism* (Katz, E., & Light, A. (Eds.), (1996). *Environmental pragmatism*. Routledge. [邦訳: 田中朋弘, 岡本裕一朗(監訳)(2019). 哲学は環境問題に使えるのか: 環境プラグマティズムの挑戦. 慶應義塾大学出版会.]) にも寄稿していることからもうかがえる通り, 環境プラグマティズムの考え方に親和的である。

一方で, それ以外の応用倫理学諸分野との関連は, 明らかにされていない。したがって, 先述の「産業哲学」をはじめ, 「農業科学の哲学」(p.298) や「農業技術の哲学」(p.304) といったカテゴリにおいて, そうした農業科学・技術の担い手である科学者や技術者, そして農家や農業従事者が, 食農倫理学においてどのような職業倫理を持つべきか, あるいはどのような役割を期待されているかについてもまた, 本書の中で明らかにされているとは言い難い。確かに植物育種家や農学者の職業倫理については一部言及が見られるものの, 例えば専門職倫理としての出自をもつ技術者倫理のコンテキストから, こうした問題がどのように捉えられるのかといったことを理解したいと望むならば, 読者にはさらなる渉猟が求められるだろう。

事実, 食農倫理学分野における専門家, すなわちフードシステムや食糧生産に携わる多くの専門家のための, 専門職倫理に関する文献も存在する。状況は国内に限定されるものの, 技術者倫理の分野では, 2000年代半ばから後半にかけて, 農林水産業に特化した技術者倫理のテキストが複数出版されている。祖田・太田による『農林水産業の技術者倫理』, 日本水産学会と日本技術士会による『水産技術者の業務と技術者倫理』, 水谷らによる『事例に学ぶ農業の技術者倫理』がそれにあたる。これらのテキストは, 必ずしも食農倫理学との接近を目的としたものではなかったように思われるが, 両者の関心については重

なる点も多い。今後、食農倫理学とその他の応用倫理学諸分野との関連をつまびらかにしようとする際、優先的に検討を開始すべき領域であるように思われる。食農倫理学に隣接する諸領域ということであれば、科学技術社会論や技術哲学、科学哲学等の研究者もまた、議論あるいは対話への参入が求められるであろう。今後本書の刊行を皮切りに、食農倫理学が対象とする話題の多くが、わが国がまさに直面している喫緊の課題として認識された暁には、トンプソンが望んだ「産業哲学」と「アグリリアン哲学」の対話のみならず、より広い範囲での意見交換が行われると思われる。

原題にも「万人のためのフードエシックス」と示されている通り、本書は全ての人々に向けて書かれたものである。著者のトンプソンは「食農倫理学を初めて学ぶ人が手にとれる一冊になるよう心がけた」(pix)としているが、訳者の太田和彦は「中・上級者向けの包括的な解説書」(p.343)と評していることから、本書が想定する読者層はかなり幅広いものとなることが予想される。一方で、この小論では、初学者が独力で通読する際に難関として立ちはだかる点があるが、少なくとも二点確認できるということを指摘した。

1970年代以降の、米国を中心とした食農倫理学における議論の概略を、特に日本語で読むことができるような類書は、決して多くない。したがって、今後国内において食農倫理学の普及を意図した場合、本書が必読書のひとつとなることが期待される。そのためにも、より多くの読者の手に取られる必要がある。本書が食農倫理学およびその関連領域について関心を持つ、少しでも多くの方に読まれることを祈りつつ、稿を終えることにしたい。

〔勁草書房、2021年、415頁〕